

小・中学校図書館オリエンテーションの目標と方法に関する一考察
—国語科教科書4社の比較による提案—

小・中学校図書館オリエンテーションの 目標と方法に関する一考察

—国語科教科書4社の比較による提案—

A Study of the Aims and Methods of Library Orientation in Elementary and Junior High School “Proposals Based on Comparisons of Japanese Language Textbooks from Four Publishers”

斎藤直人

Saito Naoto

キーワード：学校図書館オリエンテーション 図書館開き 国語科教科書 司書教諭
学校司書 利用案内 利用指導

1 はじめに

本稿の目的は、義務教育課程9年間の国語科教科書内における学校図書館オリエンテーション（図書館開きとも呼ぶ、以下オリエンテーション）の目標と方法を検討することである。

学校教育における教授法が一斉授業から「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」への過渡期である今日、学校図書館での児童生徒および教師への学習支援は必要不可欠であろう。なぜならば、学校図書館には多岐にわたる組織化された資料があり、図書館教育の専門家である司書教諭や、図書館資料のプロフェッショナルである学校司書がいるため、児童生徒へ学習環境を提供できるとともに、教師への授業支援が行えるためだ。

ただし、環境を提供するだけでは児童生徒への「主体的・対話的で深い学び」は実現できないだろう。なぜならば、図書館を利用するためには複雑な過程があるためだ。たとえば資料調査の過程であれば、児童生徒は①教師から提示された課題の理解、②知りたい事項の明確化（キーワード化）、③探している図書の分類を考える、④書架へ行き図書を探す、⑤目次や索引を使いながら該当箇所を探す、それに加えて不明点があればレファレンスサービスを受けるなど、日本十進分類法や配架のルール、参考図書の利用方法、レファレンスサービスについて理解していることが必要だからだ。

そこで、義務教育過程で行われているオリエンテーション（広義で図書館教育含む）が児童生徒へ「主体的・対話的で深い学び」となりえるのではないかと着目した。

ただし、中学校卒業後に高等学校等への進学率は98.8%¹⁾と高い割合ではあるが、1.2%は社会へ出る。オリエンテーションには、その生徒へ「社会教育への接続としての役割」も必要ではないだろうか。このような問題意識も含めたオリエンテーション内容を検討したい。

具体的には、オリエンテーションの目標と方法について、児童生徒が「主体的・対話的で深い学び」となりえる箇所を概観したうえで、オリエンテーションの実施者に関する課題を検討する。そして、オリエンテーションは国語科の授業内で実施されることが多いことから、国語科教科書にどのような記述があるのか概括したうえで提案を行う。

2 学校図書館オリエンテーションの目標と方法

オリエンテーションについて国語科教科書の記載内容の目標および方法を概観する。

日本図書館協会図書館利用教育委員会「図書館利用教育ガイドライン学校図書館（高等学校版）」²⁾によると図書館教育の中には(1)「印象づけ」、(2)「サービス案内」、(3)「情報探索法指導」、(4)「情報整理法指導」、(5)「情報表現法指導」の5領域がある。オリエンテーションにて児童生徒が「主体的・対話的で深い学び」の一助となる箇所は(1)と(2)に加え(3)および(4)、(5)の一部が該当すると考える。各領域の「目標」と「方法」を該当する部分のみ引用する。

【各領域の目標】

領域1 「印象づけ」の目標

1. 図書館は利用者の年齢にかかわらず、知る権利・読書の自由を保障する
2. 図書館は生活、学習、研究を情報面から支援する開かれたサービス機関
3. 図書館は利用者の自立を支援する教育機関
4. 図書館は憩い、集い、語らうことのできる広場
5. 図書館は種々のメディアを提供する機関
6. 図書館は物理的な空間というより世界に開かれた情報の窓
7. 図書館は気軽、便利、快適で自由な場
8. 情報活用能力（情報リテラシー）の重要性

領域2 「サービス案内」の目標

1. 自分の学校図書館の特徴
2. 施設、設備の配置
3. 検索ツールの配置と利用
4. 参考ツールの存在と有効性

5. 利用規定（開館時間等）
6. サービスの種類（貸出、予約、リクエスト、レファレンスサービス、情報検索、相互貸借、アウトリサーチ等）
7. 図書館員による専門的なサービスが受けられること
8. 図書館員による懇切、丁寧な案内、支援、協力が受けられること
9. 利用マナー
10. 行事（講演会、展示会、ワークショップ、上映会等）の案内
12. 館種の特徴と役割分担

領域3 「情報探索法指導」の目標

1. 情報探索法の意義
2. 分野ごとの情報伝達形態の違いと固有の資料の存在
3. 情報の特性の理解と評価のポイント（クリティカルリーディング等）
4. 資料の基本タイプと利用法（図書、雑誌、新聞、参考図書、AV資料、CD-ROM、オンラインデータベース等）
5. 情報機能のアクセスポイントと使い方（著者名、タイトル、キーワード、分類記号、件名標目、シソーラス等）
（中略）
11. 他機関資料の調査法と利用法
（後略）

領域4 「情報整理法指導」の目標

1. 情報整理法の意義
2. 情報内容の抽出と加工（要約、引用、パラフレイズ、抄録、翻訳、解題等）
3. メディア別の情報記録の方法（メモ・ノート法、カードの記録法、クリッピング、データベースのダウンロード、録音・録画等）
4. 発想法（ブレインストーミング・KJ法等）

領域5 「情報表現法指導」の目標

1. 情報表現法の意義
2. 情報倫理（著作権、プライバシー、公正利用等）
3. レポート、論文、報告書等の作成法（構成、書式、引用規則等）
4. 印刷資料の作成法（パンフレット・リーフレット・ミニコミ紙等の編集、印刷、製本の方法等）
（中略）
8. プレゼンテーションの技法（話し方、資料の提示法—OHP、板書法、ホワイトボー

ド、AV資料、マルチメディア資料の活用)
(後略)

【各領域の方法】

領域1 「印象づけ」の方法

- ・教科授業との関連なし
 1. ポスター、ステッカー、ちらし等の広告媒体による図書館の存在の印象づけ
 2. 校内の広告媒体（学校新聞、校内放送等）による印象づけ
 3. 図書館出入り口付近のサインの工夫と館外から見える場所の展示
 4. 地域の広報チャンネル（ミニコミ、マスコミの地方版の活用）
 5. ブックトーク
- ・教科授業との関連あり
 1. 授業の中で教師による図書館の意義への言及
 2. 授業テーマに関連づけたブックトーク

領域2 「サービス案内」の方法

- ・教科授業との関連なし
 1. 新入生オリエンテーション
 2. 学年別オリエンテーション
 3. パンフレット、リーフレット（「利用のてびき」を含む）の配布
 4. サービス案内ビデオの上映
 5. AV、CAIによる双方向ディスプレイ等を利用したインフォメーション
 6. 館内ツアーの実施
 7. サイン計画
 8. 窓口での図書館員の対応
 9. 投書箱の設置
 10. リクエストコーナーの設置
- ・教科授業との関連あり
 1. 教科別オリエンテーション
 2. 授業・レポートに関して、レファレンスサービスをはじめとした各種図書館サービスが利用できることを生徒に知らせる。またそれらを利用するように教師から指導する

領域3 「情報探索法指導」の方法

- ・教科授業との関連なし
(前略)
- 2. 「図書館クイズ」等資料の配置を把握させるためのゲーム等の企画、実施

3. 図書館内オリエンテーリングの実施

(中略)

7. 最寄りの図書館、資料館、博物館等の類縁機関、その他書店、古書店等の紹介

(後略)

・教科授業との関連あり

1. 教科の内容と関連づけて、情報探索の方法について授業時間内に説明し、実習させる
(後略)

領域4 「情報整理法指導」の方法

・教科授業との関連なし

(省略)

・教科授業との関連あり

1. 教科の内容と関連づけて、情報整理の方法について、授業時間内に説明し、実習させる

領域5 「情報表現法指導」の方法

・教科授業との関連なし

(省略)

・教科授業との関連あり

1. 教科の内容と関連づけて、情報表現の方法について、授業時間内に説明し、実習させる

引用したガイドラインは、高等学校向けであり、なおかつ1998年に策定されたため、小・中学校にすべて応用できない。また一部表記が古い感も否めない。しかし、今日の小・中学校図書館で行われている図書館教育やオリエンテーションへ示唆を富むものだ。たとえば、定期的に発行する「学校図書館便り」は「印象づけ」の「目標」1や2、場合によっては5、6、7にも該当するだろう。また、領域1の方法「教科授業との関連なし」の2に該当する。

では、オリエンテーションはどうだろうか。領域1「目標」は全て当てはまる。「方法」は「教科授業との関連なし」1や2、3、5および「教科授業との関連あり」1、2が該当する。

領域2「サービス案内」「目標」はすべてが該当する。領域2「サービス案内」「方法」は「教科授業との関連なし」では1および2が該当する。また、オリエンテーションの内容によっては6も含まれるだろう。加えて「教科授業との関連あり」では1と2が該当する。

また、領域3「情報探索法指導」「目標」は全てが該当するだろう。「情報探索法指導」「方法」は「教科授業との関連なし」および「教科授業との関連あり」は全てが該当する。

領域4「情報整理法指導」「目標」では1、2が該当。「方法」「教科授業との関連あり」では1が該当する。

オリエンテーションの展開によっては、領域5「情報表現指導」「目標」8、「方法」「教科授業との関連あり」1が該当するだろう。

3 オリエンテーションの実施者に関する課題

オリエンテーションに主軸を置き「図書館利用教育ガイドライン学校図書館（高等学校）版」の5領域を俯瞰すると、①利用案内と②利用指導が混在していることが見受けられる。たとえば①では、図書館内の説明や貸出・返却方法、貸出冊数、貸出期間などは学校図書館の利用方法の案内であり、司書教諭および学校司書が説明できるものであると考える。一方②では、学年の「めあて」や必読図書の指導、読書指導、参考図書の利用指導など学校の教育目標を遂行するための指導に当たり、司書教諭の職務であろう。

この職務分担を考えるうえで、全国学校図書館協議会の司書教諭と学校司書の職務比較を紹介する³⁾。

司書教諭の根幹的職務は「経営」と「指導」である。具体的には、自校の教育目標に照らし合わせて、経營業務の一つである「学校図書館経営方針の立案」をする。それによって「学校図書館経営・運営計画の立案」をする。その中にオリエンテーションが位置付けられて実施される。このように図書館教育に位置づけられたオリエンテーションは、先にも触れたように①利用案内と②利用指導が含まれていることから、本来であれば司書教諭がオリエンテーションを児童生徒へ実施すべきと考える。

しかし実態は、学校司書が配置されている地域では①と②両方を学校司書が行っている印象を持つ。また、学校司書が配置されていない地域では司書教諭またはクラス担任が実施している場合や、そもそも実施していない場合もあるようだ。

つまるところ、「整備」と「奉仕」を中心的職務とする学校司書が図書館教育の一つに位置づけられ、かつ国語教科書にオリエンテーションの記述があり、授業としての側面も併せ持つものを主体的に行うのであれば、国語部教師・司書教諭・学校司書の三者による「目標」と「方

主として「司書教諭」が行う職務	主として「学校司書」が行う職務
経営 <ul style="list-style-type: none"> ・学校図書館経営方針の立案 ・学校図書館経営・運営計画の立案 ・研修計画の立案 ・学校図書館組織の編成 ・規程・基準類の作成 ・学校図書館評価 ・校内・校外組織との連絡・調整 指導 <ul style="list-style-type: none"> ・読書指導の実施・協力・支援 ・学習指導の実施・協力・支援 ・情報活用能力育成指導の実施・協力・支援 ・児童生徒図書委員会の指導 	整備 <ul style="list-style-type: none"> ・学校図書館メディアの組織化 ・調査統計・記録の作成 ・展示・掲示の作成・管理 ・図書館施設・設備の維持・管理 奉仕 <ul style="list-style-type: none"> ・学校図書館メディアの提供 ・学習活動の支援 ・レファレンスサービス ・情報の紹介、資料リストの作成 ・読書案内 ・広報活動 ・ホームページの作成・更新 ・機器の利用の支援

法」の検討が最低限必要であろう。この三者の協議を調整するのは司書教諭の職務であることは言うまでもない。それでは、そのことも鑑みたくえて国語科教科書のオリエンテーションと図書館教育に関する記述を概観したい。

4 小・中学校国語科教科書比較

私が国語科教科書に着目した一要因は小・中学校教師の声だ。具体的には「オリエンテーションは必要だと思うが、教科書に学校図書館オリエンテーションの記載があれば実施する切っ掛けになる」というものだ。

では、オリエンテーションの記述を俯瞰するために複数ある教科書から、政令指定都市における採択数の多いものを4社選んだ。図の採択一覧は引用元より作成した⁴⁾。

今回は、光村図書、東京書籍、教育出版、三省堂の教科書を学年ごとに比較するが、紙幅の都合上、特筆すべき個所のみ述べる。単元および小単元には「 」を付した。また、教科書の記載内容に展開がある場合は、概要欄の単元名に数字を付した。

国語教科書採択一覧

	政令指定都市	小学校	中学校	小学校 採択数	
1	札幌	光村	光村	光村	12
2	仙台	東京書籍	光村	東京書籍	5
3	新潟市	東京書籍	光村	教育出版	3
4	さいたま市	教育出版	教育出版	三省堂	0
5	千葉	教育出版	光村	中学校 採択数	
6	川崎	光村	光村		
7	横浜	光村	光村		
8	相模原	光村	光村		
9	静岡	光村	光村		
10	浜松	光村	光村	光村	16
11	名古屋	教育出版	光村	東京書籍	1
12	京都	光村	光村	教育出版	1
13	大阪	東京書籍	三省堂	三省堂	2
14	堺	光村	光村		
15	神戸	光村	光村		
16	岡山	光村	三省堂		
17	広島	東京書籍	光村		
18	北九州	光村	光村		
19	福岡	光村	光村		
20	熊本	東京書籍	東京書籍		

小1						
出版社	教育出版	東京書籍	三省堂	光村		
頁	上70～75	上14	上94	上12～13	上92～95	下50～51
单元名	「としゃかんへいこう」 「おはなしのくに」	「ほんがた くさん」	「としゃかん へいこう」	「どんなおは なしかな」	「ほんはとも だち」	「本をえらんでよ もう」
概要	<ul style="list-style-type: none"> ・読書ができることや貸出ができること、読みたい本を探せることをイラストで紹介。 ・挿絵に「4. しぜん」「9. ものがたり」がある ・見開き4ページを使い、イラストで竹取物語や浦島太郎、桃太郎などのお話の場面がある 上78～77頁「1にほんのおはなし、せかいのおはなし」へ展開できる構成	<ul style="list-style-type: none"> ・読み聞かせに向く絵本および読み聞かせの場面を紹介 	<ul style="list-style-type: none"> ・4類、8類、9類、E（絵本）、おすすめの本コーナー、カウンターがイラストで紹介されている 	<ul style="list-style-type: none"> ・読み聞かせに向く絵本および読み聞かせの場面を紹介 	<ul style="list-style-type: none"> ・絵本（科学絵本含む）の紹介 ・面白かった本の紹介する場面がある ・面白かった本の音読をする場面がある 	1「よみたい本をえらびましょう。」 ・読みたい本を選ぶ（貸出含む） 2「『ずうっと、大すきだよ』をよみましょう。」 3「よんだ本をカードにかいて、ともだちにしらせましょう。」 ・書名や登場人物、好きな場面、名前を記入させる

すべての教科書で前掲ガイドラインの「目標」領域1の1や2、5、7に該当。光村はそれに加えて「目標」4を含む。また、ガイドラインの「方法」【教科授業との関連あり（以下あり）】1「授業の中で教師による図書館の意義への言及」が4社とも必要な構成だ。

小2				
出版社	教育出版	東京書籍	三省堂	光村
頁	上38～39	上24～25	12	106
单元名	「図書館で本をさがそう」	「としゃかんへ行こう」	「としゃかんへいこう」	「本を大切にしよう」
概要	<ul style="list-style-type: none"> ・司書によるレファレンスサービス事例紹介 480昆虫、朝読書に向く図書、「うさぎ」が出てくる図書、「まつたにみよこ」の図書、「しぜんかがく」の図書 ・「図書館地図」の作成。図書館で図書を探し、分かったことを地図に記入 新着図書コーナー、著者名や題名で図書を探すことができる、サインの存在、お話し会、図書館内マナー 	<ul style="list-style-type: none"> ・見開きが図書館内イラストになり、書架の上に分類番号のサインがある ・書架を見ている子どもの吹き出しの中に「うさぎ」を探していることや、「おはなし」の書架の所在地が分かるようになってい ・カウンターにて、貸出の様子もある 	<ul style="list-style-type: none"> ・読書カードの利用を紹介 気に入った図書の題名、著者名、感想、氏名を記入させる 	<ul style="list-style-type: none"> ・3点の利用マナーについて紹介 「本を本だなからとり出すとき」 ・のどに指をかけないこと 「本を読むとき」 ・ページをめくるときは静かにめくこと ・落書きをしないこと、汚さないこと 「本を本棚に戻すとき」 ・元の場所に戻すこと ・立てて戻すこと

教育出版では、概要の前者にて「目標」領域2の6、「方法」領域2【あり】の2に該当。後者は「目標」領域2の1、2、5、6、「方法」領域2【教科授業との関連なし（以下なし）】8および【あり】2に該当。2年次では領域2の指導が行われる。

小3					
出版社	教育出版	東京書籍	三省堂		光村
頁	上46	上24	12	48	上88～91
単元名	「本で調べよう」	「図書館へ行こう」	「図書かんへ行こう」	「本を探そう」	「本を使って調べよう」
概要	<ul style="list-style-type: none"> ・目次や索引など図鑑の使い方 ・奥付の見方 ・読書カード（奥付、概要、感想）の作成 ・本の構造（カバーや帯、表紙）の紹介 	<ul style="list-style-type: none"> ・「本のなかま分け」にて0～9類の紹介 ・書架の並びが分類番号順 	<ul style="list-style-type: none"> ・「どくしょカード」の利用 読んだ図書や、調べた図書、面白かった図書、役に立った図書の題名、著者名、感想、氏名を記入させる 	<ul style="list-style-type: none"> ・図書は分類ごとに配架されている ・好きな植物の記載がある図書を探して、書名・著者名を書く 	<ol style="list-style-type: none"> 「図書館のくふうを知ろう。」 館内案内図、検索用コンピュータ、別置コーナー、本棚、司書の紹介 「本を使って調べる方法を知ろう。」 事典、図鑑、科学読み物などの本、目次、索引の使い方 「『里山は、未来の風景』を読もう。」 「『里山は、未来の風景』を読んで、もっと知りたいと思ったことを本で調べよう。」 2の内容をもとに調べる

教育出版と光村における目次や索引など図鑑の使い方は「目標」領域3の4、「方法」領域3【あり】1に該当。また教育出版と三省堂の読書カード作成では、「目標」領域4の3、「方法」領域2【あり】1に該当。

小4					
出版社	教育出版	東京書籍	三省堂		光村
頁	上42	上22～23	12～13	108	上90～93
単元名	「分類をもとに本を見つけよう」	「図書館へ行こう」	「図書館へ行こう」	「百科事典で調べよう」	「『読むこと』について考えよう」
概要	<ul style="list-style-type: none"> ・分類番号が背ラベルと書架サインにあること ・日本十進分類法の紹介 「図書館の分類の仕方をたしかめよう。」 ・学校図書館と公共図書館の配架を確かめる 	<ul style="list-style-type: none"> ・背ラベルの役割 ・分類番号ごとに書架が並んでいることをイラストで紹介 	<ul style="list-style-type: none"> ・図書館における図書の紹介方法 新着図書や図書委員会のおすすめ図書コーナーを紹介 	<ul style="list-style-type: none"> ・百科事典の使い方 	<ol style="list-style-type: none"> 「何を読んでいるか、ふり返ろう。」 普段、どのような媒体を読んでいるか 「どのように文章を読んでいるか、考えよう。」 物語と図鑑の読む目的が異なる 「『かいげ』を読もう。」 「読んだ作品をしょうかいしよう。」 おすすめ図書の書名や著者名、感想、理由、引用、絵をカードに書いて紹介 読みたい本の見つけ方の紹介

教育出版「学校図書館と公共図書館の配架を確かめる」では「目標」領域2の2、「方法」領域2【なし】7、それに加え領域3の11、「方法」領域3【なし】7に言及している。つまり、他社に比べていち早く公共図書館の利用を促している。

小5					
出版社	教育出版	東京書籍	三省堂		光村
頁	なし	22～23	12～13	106～107	70～83
単元名		「図書館へ行こう」 ・背ラベルの役割 ・日本十進分類法の類、網、目の説明	「図書館へ行こう」 ・図書の探し方の紹介 学校司書に聞く、コンピュータで探す、目録を使う	「本の分類を知ろう」 ・類の説明と書架の配置 ・日本十進分類法の類、網、目の説明	「広がる、つながる、わたしたちの読書」 1「本をすすめるための方法を知ろう。」 ・（書店を例として）本のポスター、ポップ、本の帯の紹介 ・（図書館を例にして）ブックトーク、特設コーナー 二つの例から、目的や相手に応じて、どんなことを伝えたいか。また相手が、読んでみたいと思うように、言葉や文章の表現をどう工夫するかを考える 2「『千年の釘にいどむ』を読もう。」 3「本をすすめよう。」 ・1の内容を参考に「本をすすめる」手だてを考えさせる
概要					

光村1「本をすすめるための方法を知ろう。」および3「本をすすめよう。」では、「目標」領域4の3、「方法」領域2【あり】1に該当。

小6					
出版社	教育出版	東京書籍	三省堂		光村
頁	なし	24～25	12～13	112～113	54～72
単元名		「図書館へ行こう」 ・公共図書館への利用方法紹介（コンピュータで図書検索ができる） ・歴史資料館・郷土資料館、科学館、動物園・水族館、美術館の紹介	「図書館へ行こう」 ・好きな本の関連本の探し方 ・同じシリーズの本 ・同じ作者の本 ・同じテーマの本	「調べるための本」 ・図鑑・事典、地図・年表・地域史料、年鑑・白書・統計集の利用方法	「私と本」 1「これまでにどんな本に出合ってきたかをふり返ろう。」 ・読書記録を読む ・学校図書館で、出会った本を思い出す ・学習活動を振り返る 2「自分と本との関わりについて考え、伝え合おう。」 ・どんなとき、本を読みたくなるか ・どのくらい本を読んでいるか ・どんな読み方をしているか ・どこで読むか ・読むとき、自分にどんな変化が起きるか ・どんな本が好きか ・これから読みたい本は、どんな本か 3「いちばん心にのこっている本について考えよう。」 4「『森へ』を読もう。」 5「いちばん心に残っている本について、文章にまとめよう。」 「施設を利用して、本の世界を広げよう」 ・文学館の紹介
概要					

東京書籍では、公共図書館および歴史資料館などの記述があり、「目標」領域3の11、「方法」領域3【なし】7に言及している。また、光村「施設を利用して、本の世界を広げよう」も同様だ。

中1				
出版社	教育出版	東京書籍	三省堂	光村
頁	なし	268～269	234～235	なし
単元名		「情報の調べ方」	「読書ガイドンス 情報探しのヒント」	
概要		<ul style="list-style-type: none"> ・図書館やインターネット、新聞の活用方法を紹介 ・図書館で情報を探す場合、目録やコンピュータ、レファレンスサービスがあることを紹介 ・事典・図鑑、辞典・辞書、年鑑の使い分け 	<ul style="list-style-type: none"> 「インターネットで探す」 ・検索エンジンの利用 検索するときのキーワードの入れ方 「図書館で探す」 ・日本十進分類法（NDC）紹介 	

東京書籍および三省堂は、情報の調べ方を総合的に記述している。これらは「目標」領域3の2～7、「方法」領域3【あり】1に該当。

中2				
出版社	教育出版	東京書籍	三省堂	光村
頁	328	なし	246～247	84～85
単元名	「図書館で本を探そう」		「読書ガイドンス 情報探しのヒント」	二年一組のお薦め三十五冊 読書案内を作ろう
概要	<ul style="list-style-type: none"> ・日本十進分類法（第2区分）と背ラベルの分類番号、図書記号、巻番号を紹介 		※1年時と同一内容	<ol style="list-style-type: none"> 「薦めたい本を選ぼう」 ・読書記録などを振り返り1年生へ1冊お薦め本を選ぶ。 ・薦める理由を考える 「選んだ本に関する情報を集めよう」 ・入手方法 ・著者について ・本の内容・書評 「読書案内を作成しよう」 ・書誌情報のレイアウトをクラスで話し合って決める 「完成した読書案内を読み合おう」 ・読んで感想を伝え合う

教育出版は「目標」領域3の5、「方法」領域3【あり】1に該当。日本十進分類法の第2区分まで記載があり、小学校時のオリエンテーションの復習に使いやすい。

中3					
出版社	教育出版	東京書籍	三省堂		光村
頁	70	なし	66～71	228～229	なし
単元名	「無言館の青春」		「状況に応じて話す力を養う」	「読書ガイダンス 情報探しのヒント」 ※1年時と同一内容	
概要	「Ⅰ自分の読書生活を振り返ろう」 ・読書傾向確認シートおよび読書記録の活用提案 「Ⅱおすすめの本を紹介しよう」 ・テーマを決めておすすめの本を友達に紹介 ・書評やブックリストを参考に読書コーナーの作成 「Ⅲビブリオバトルに挑戦しよう」		・ブックトークとビブリオバトルのやり方		

教育出版の「読書傾向確認シート」「読書記録」は「目標」領域3、「方法」領域3【あり】1に該当。また、教育出版および三省堂のブックトークやビブリオバトルは領域5「情報表現法指導」「目標」8、「方法」【あり】1に該当。

5 オリエンテーション内容への提案

教科書比較では、領域5「情報表現法指導」の内容は中学校にて記載があった。しかし、ビブリオバトルや、読書教育に関する指導は小学校からでも実施可能であろう。

そこで、本稿のまとめとして前掲ガイドライン領域5「情報表現法指導」まで含めたオリエンテーション内容への提案を行う。ただし、学校によって児童生徒の実態が異なるため、提案はあくまで参考としていただきたい。

本提案は小5までだが、小6以降オリエンテーションが不要というわけではない。むしろ、小学校高学年および中学生になれば、図書館の利用頻度が少なくなる傾向のため、基本を押さえ、かつより充実したオリエンテーションを積極的に行いたい。

具体的には小6以降は、小5までの内容の復習および発展を行いたい。たとえば、領域4「情報整理指導」目標3メディア別の情報記録にて、読書記録や読書カード作成を継続的に行う。また領域5「情報表現指導」8プレゼンテーション技法にてビブリオバトルやブックトーク、リテラチャーサークル、アニメーションなども良いだろう。また、中3では社会教育施設のおさらいやOPACの利用方法を紹介および演習を実施したうえで、生涯学習施設の利用を促したい。

最後に、オリエンテーションは新年度当初に行われることが多いが、中学校2・3年生であれば時期にこだわらず定期テスト明けや、単元の終わりの一コマを融通してもらおうと実施しやすい。ぜひ、国語部と図書館部の連携で、児童生徒が主体的に図書館を利用できるように指導していただきたい。本稿がその力添えとなれば幸いだ。

オリエンテーション実施案

学年	目 標	方 法
小 1	領域 1 「印象づけ」	1 図書館は利用者の年齢にかかわらず、知る権利・読書の自由を保障する
	領域 2 「サービス案内」	2 施設、設備の配置
		5 利用規定
		6 サービスの種類
		9 利用マナー
小 2	領域 3 「情報探索法指導」	11 他機関資料の調査法と利用法
	領域 4 「情報整理法指導」	3 メディア別の情報記録の方法
	領域 5 「情報表現指導」	8 プレゼンテーション技法
小 3	領域 2 「サービス案内」	2 施設、設備の設置
	領域 3 「情報探索法指導」	8 時間資料の組織法と入手法
	領域 3 「情報探索法指導」	4 資料の基本タイプと利用法
小 4	領域 2 「サービス案内」	2 施設、設備の設置
	領域 3 「情報探索法指導」	8 時間資料の組織法と入手法
	領域 3 「情報探索法指導」	4 資料の基本タイプと利用法
小 5	領域 2 「サービス案内」	2 施設、設備の設置
	領域 3 「情報探索法指導」	8 自館資料の組織法と入手法
	領域 3 「情報探索法指導」	4 資料の基本タイプと利用法
	領域 3 「情報探索法指導」	11 他機関資料の調査法と利用法

注

- 1) 文部科学省「学校基本調査－平成30年度結果の概要－」
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1407849.htm
最終アクセス日 2018年10月1日
- 2) 日本図書館協会図書館利用教育委員会「図書館利用教育ガイドライン学校図書館（高等学校）版」『図書館利用教育ガイドライン 合冊版』 日本図書館協会 pp.26～27 2001年
- 3) 全国学校図書館協議会「学校図書館担当者のための情報館」
<http://www.j-sla.or.jp/new-shishokyoyu/gakkousishotoha.html>
最終アクセス日 2018年10月1日
- 4) 日本教材出版「2018年度教科書採択表」
<http://www.nihonkyouzai.jp/11089.html>
最終アクセス日 2018年10月1日